

2006年2月26日 降誕節第10主日礼拝

『良い方を選ぶ』

(詩編73編21～28、ルカ10章38～42)

主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。」

主イエス一行がある村にお入りになると、まさきに迎え入れた人がいました。マルタです。おそらく主イエスを神の御子と信じて、そうしたのでしょう。ところがマルタは、主イエスを迎え入れこそしたものの、主が語るみ言葉に耳を傾けようとはしませんでした。それをしたのは、マリアという姉妹でした。マルタは、いろいろなもてなしのために、せわしなく立ち働いていたのです。主イエスのために、マルタは心を配り、立ち働いていたのでしょうか？ それとも他の何かに心をふさがれていたのでしょうか？ 主イエスによれば、マルタは「多くのことに思い悩み、心を乱して」いました。「あれも、これも」しなければとパニックになり、イエス様のことなどどこかに吹き飛ばしてしまっていたのです。まるで、あの種蒔きのたとえのようです。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。…ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出したが、水気がないので枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。またほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍のみを結んだ。…聞く耳のある者は聞きなさい」(ルカ8章4～8)。「茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。」(ルカ8章14)

マルタの心の中を、主イエスは見抜いておられました。主イエスを受け入れるには受け入れた。しかし途中で、この世の思い煩いに覆いふさがれてしまっただけは、信仰の実が熟することはできません。主イエスの目には、このときのマルタはそのように映っていました。マルタは今、信仰の危機にあると。もちろん、本人はそうは思っていません。イエス様のために自分は一生懸命しているつもりです。でもイエス様の目に映ったのは、神様のため、主イエスのため、教会のため、そう言いながら、世の「思い煩い」に覆いふさがれていくマルタの姿でした。何をしようか、何を飲もうか(食べさせようか)と、この世のことで思い煩い、神様から、キリストからどんどん離れていくマルタ。このマルタを救うために、主イエスはかけがえのない一言(御言葉)を、マルタに与えます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。」

すなわち、主イエスの語る神の国の福音をまず受け入れること。マリアがしたように、他の何を置いてもまず、主イエスの語る神の御言葉に仕えよう。これこそ、なくてはならないただ一つのことだ。そう主イエスは仰せになったのです。

このお言葉は、主が様々な場面で語られた御言葉に通じます。「人はパンだけで生きるも

のではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ4章4)。かつて主イエスが、公生涯の始めに、悪魔から試みを受けられたときのみ言葉です。40日間荒野で断食して、お腹をすかせているイエスに向かって、悪魔は言いました。「これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。メシアなら、それくらいのことはたやすいだろう。この誘惑に対する答えが、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」でした。

あるいは、主イエスを慕って集まった人々を前にして、山の上で語られた説教の中にも、こうあります。「だから『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って思い悩むな。...信仰の薄い者たちよ...それらはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6章31~33)。

まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、それらのものは添えて与えられる。わたしたちも、添え物のことで思い煩っていないでしょうか？ あれも大事、これもなければ。そういいながら、最も肝心なことをおろそかにしてはいないでしょうか？ むしろ、見るべきものをしっかりと見つめ、聞くべきことをしっかりと聞き取り、今なすべきことを誠実にこなしていけるように。わたしたちの信仰が、神の国に向かって枝を張るために、主イエスが語られた一つ一つのみ言葉を、聞いて信じて行なうことが大切です。主イエスがわたしたちの心に蒔いてくださった救いの種を、粗末に扱ってはなりません。自分自身に、もっと気を配りましょう。

種蒔きのたとえで主イエスが心配しておられるたのは、信仰の途中で茨にふさがれる人がいることです。初めから信じなかったのではなく、最初はキリストを信じていたのに、いつの間にかそうってしまった。最初、み言葉を喜んで聞いていたはずの人が、しばらくしたら、人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、信仰の実をつけることができなくなる。そういうことにならないようにと、主イエスはわたしたちを戒められました。

ここで、「思い煩い」と「富の誘惑」と「さまざまな快樂」が一緒にでてくることも注目です。金銭の誘惑とか様々な快樂というと、それは罪だとすぐわかります。しかしこの世の思い煩いというと、あまり悪いことではないように思われがちです。世の思い煩いに悩まされていると、まるで被害者になった気分、開き直ってはいないでしょうか？ もちろん、様々な思い煩いがこの世にはあります。それを避けて通ることはできません。でも、さまざまな思い煩いと戦うのか、それとも思い患いに巻き込まれて仲良くするのか。まったく違います。主イエスはおっしゃいました。「あなたがたには世では悩み(苦難)がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ16章33)。主イエスは、ご自分を慕い、ご自身を頼りにする者たちに、神の国で勝利を与えると約束されました。この約束を信じて、主のみ言葉から片時も離れることなく、主に従って勝利を得ましょう。主がそうお望みです。

そうなるために、何がなくてはならないか。それを示すために主イエスは、マルタに対して、あの一言を残されました。「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。マリアは「良い方を選んだ」。この「良い方」というのは、旧約聖書にたびたび出てくる「分け前」とか「嗣業」と訳された言葉です。詩編 73 編 26 節にも出てきます。「神はとこしえにわたしの心の岩、わたしに与えられた分」。同じく旧約聖書には、「主こそわが嗣業」という表現があちこちに見られます。この言葉はもともと、神がアブラハムとその子孫に与えると誓われた土地、約束の土地のことを指していました。あるいは親から子へと受け継がれる財産、遺産を言うこともありました。やがてそれは、神が愛するイスラエルに与える嗣業、それも目に見える土地や財産ではなく、主こそがイスラエルに与えられた分（嗣業）、というふうになりました。

この詩編を詠んだ信仰者は、この信仰に目覚めて、あらゆる思い煩いから解き放たれたのです。はじめこの人は主なる神様を信じていました。しかしこの世で悪人ばかりが栄えるのを見て、うらやみます。神を信じて生きること、どれほどの値打ちがあるのか？と疑い始めます。それでも何とか「心を清く保ち」、神への信仰に生きようと努めました。それでも、ただむなしさだけがわたしの人生を支配する。人生のむなしさを、とことん味わい尽くすのです。もはや自分の思いや力では、信仰を保つことすらできない。そのようなとき、もう一度だけ、この信仰者は、神様のおられる神殿に向かいます。そこで神をまことに神としてあがめ、礼拝をささげます。するとそこで、力が与えられました。「あなたがわたしの右の手を取ってくださいるので、常にわたしは御もとにとどまることができる。あなたは御計らいに従ってわたしを導き、後には栄光のうちにわたしを取られるであろう」（詩編 73 編 23～24）。

神を求めて礼拝に行くまでは、「わたしは心が騒ぎ、はらわたの裂ける思いがする」（21 節）。そう言っていた人が、もう一度だけ。そう思って主を尋ねると、そこで神様に会います。そこには悔い改めが起きました。「(かつての)わたしは愚かで知識がなく、あなたに対して獣のようにふるまっていた」（22 節）。しかしそんなわたしを神様は再び捕らえてくださった。主の御元になお留まることができているのは、ただ主の憐れみのお陰です、と。主に受け入れていただいた喜びを、心から歌い上げています。そして言うのです。主こそ「わたしの心の岩、わたしに与えられた分（嗣業）」と。

この箇所を、宗教改革者ルターは、こう訳しました。「主よ、あなたがわたしの神でいてくださるなら、天でも地でも、わたしは（あなたのほかには）何ももめません」。主こそわたしの受け継ぐべき分（嗣業）ならば、わたしは何を失っても恐れません。

「良い方を選びなさい」と主イエスがおっしゃったのは、まさにこのことです。わたしたちの生活は、さまざまな恐れ、とまどい、思い煩いに満ちています。神様を信じているつもりでいても、いつの間にか茨にふさがれ、天にいます神が見えなくなってしまいます。身も心も、わたしたちは弱いのです。しかしわれわれの弱さを、主はご存じです。主はわれらを憐れみ、助けてくださいます。守ってくださいます。だから言われました。良い方

を選びなさい、と。「良い方」とは、いつもわたしたちのことを心にかけていてくださる神様のことです。父・子・聖霊としています神です。

最も幸いな人生へと、わたしたちを導いてくださる御方を選びなさい。この御方が今、御子イエス・キリストとなって世に降り、わたしたちのすぐそばに来てくださいました。そして、「もっと、わたしのそばにいらっしやい。あなたたちを祝福しよう」と、わたしたちを招いておられます。だから、この御方のもっと近くに身を寄せましょう。マリアがそうしたように！ 思い患いはすべて脇に置いて、すべてを捨てて主に委ね、最も良い御方に身を寄せていこうではありませんか。もし、この方から遠ざかるならば、待っているのは滅びです。神の御もとから迷い出ることほど、恐ろしいことはありません。でも神様を頼るなら、主は決してわたしたちを見過ごしになさいません。神は、どんな人でも、喜んで、人生もろとも、わたしたちを引き受けてくださいます。すでにわたしたちは、神の右の手にしっかりと捕らえられているのです。イエス・キリストを信じたお陰で、主の御もとに留まっていられるのです。なんという幸いでしょう！ この幸いを更に確かなものとするために、主のみ声にもっと親しみ、主の御言葉に聞いていきましょう。

あの詩編の言葉が、わたし自身の言葉となるように。「わたしは、神に近くあることを幸いとし、主なる神に避けどころを置く。わたしは（神の）御業をことごとく語り伝えよう」（詩編 73 編 28）

[説教者：堀地正弘牧師]